走り読み文学探訪リバイバル(その23)

「たけくらべ」

著者: 樋口一葉

（初出）文学界(1895～1896不定期連載)

紹介者:榎本博康

［紹介］

集英社文庫版(1993)の表紙

年はようよう数えの十四。美登利(みどり)は吉原の売れっ子おいらんの妹で。負けん気が強く、気風（きっぷ）がいい。

子供達は表町の正太郎と横町の長吉が対立関係にあった。そして正太郎は美登利と仲が良く、一緒に遊ぶ仲。一方長吉は龍華寺の信如（しんにょ）をグループの総領としているが、信如は争い事が好きではない。これは正太郎とて同じで、ただ取り巻きがそうはさせない。

正太郎達の夏祭りの夜の趣向をぶち壊そうと、長太郎達は殴り込みをかける。しかし丁度正太郎はいない。手下の三五郎を手酷く痛めつけ、美登利の顔に泥ぞうりをぶつけるという乱暴狼藉(ろうぜき)。

実は美登利と龍華寺の信如、共に学校は私立の育英舎。たがいに好意をもちながら、子どもたちの間の対立が、二人の心をすれちがわせ、傷つけていた。

やがて酉の市、美登利が髪を大嶋田に結って歩いていた。正太郎は少しの間、美登利を見かけないので心配していたのだった。しかし美登利はもう彼と遊ぼうとはしない。この日を境に人が変わってしまったようだ。

冬のある霜の朝、美登利の家に水仙の造花が差し入れてあり、彼女はそれを部屋に飾った。後から聞けば、信如が仏教学校に入るべく、出立した朝だったと。

［感想］

現代のコギャルファッションは古典だった。美登利の様子を見ると、「柿色に蝶々を染めた大形の浴衣を着て、……足にはぬり木履ここらあたりにも多くは見かけぬ高さをはきて、…」この後半を現代訳すれば、「……足には厚底サンダルのここ原宿でもほとんど見かけないような高いのをはいて」とでもなるのだろうか。この登場の仕方には驚いた。

さて、ランニング文学探訪は本探しから始まる。走れメロスのようにタイトルに「走」の字が書いてあれば簡単だが、あとは推理によることも多い。たけくらべは子供の話だし、明治時代だから絶対に走ると推理した。そして果たしてその通りだったが、これほど豊な走りの描写があるとは期待以上であった。使用している言葉を、遅いほうから並べると、「急ぐ」「ちょこちょこ走り」「走る」「駈ける」「駆ける」「馳せる」「飛ぶ」となる。これらの言葉がどのように使われているかを少し見てみよう。

ちょこちょこ走りは、最近見かけることは絶えて無くなったが、娘さんの走り方である。しかし美登利はやらない。彼女は走るのだ。着物のすそをかばいながらのちょこちょこ走りは、かなりわざとらしい走り方でもある。美登利は、例えば正太郎を見つけて走りよる。すそを乱

Copyright © Enomoto PE Office, all rights reserved.

すことはない。ただ自然に走るのだ。そのような美登利の身のこなしが、ちょこちょこ走りの対比で浮かび上がる。一葉さん描写がうまいねえと、うなってしまう。

次は速いほうを。夏祭りの夜の趣向はたくさんの幻灯。でも夕方が近いのに美登利が未だ来ない。三五郎に呼びに行かせる。「おっと来たさの次郎左衛門、今の間とかけ出して韋駄天とはこれをや、あれ彼の飛びようが可笑しいとて見送りし女子どもの笑うも無理からず…」三五郎は身振りがこっけいな所があり、それが一所懸命に走っていくのだから、余りにも生真面目で、それが人々の好感を呼ぶ。飛んで行く彼の草履の砂埃までもが見えそうな風景である。一葉さん、くどいけどうまい。

走るということを、これほど日常の中で多様に描き分けた小説は他にないのではなかろうか。私は、走るという行為が、我々の生活の日常と非日常の境にあるらしいということに、永年興味を抱いていた。それだけに、日常での走りに非常に興味があり、たけくらべのような作品を求めていた。再発見である。

ところで、たけくらべのテーマは成長である。子供から大人への成長である。そのクライマックスは、美登利の初潮である。一葉はこのような具体的な用語を全く用いずに、これを色深く表現している。つまり大嶋田に続く描写である。文学作品でしかできない世界であり、世界の文学でも類の無いものとの評価もあるという。

樋口一葉は明治5年に生まれ、余りにも早く明治29年(1886年)に24歳にて肺結核で死去した。しかしこのような時代に、一人の女性が小説で生活をしようとし、実現した、そのすばらしい意思と力量に驚嘆する。マラソンプロ宣言の有森もすごいし、苦労も想像を絶すると思うが、一葉も並大抵ではなかったと思う。今以上に時代背景が過酷であった。

一葉は擬古文と呼ばれる文体で執筆しており、すでに現代人には難しく、現代語訳の本も複数出ている。絵本、ビデオもあるようだ。しかし、一葉が書いた擬古文でこそ読んで欲しい。文章の格調と勢いがいいのだ。特に、各章の書き出しがキリッといい切り口を見せて、小気味がいい。全く映画のようなのだ。初めの一行のうちに、前段と異なる、次章の開始の映像をきちっと描き切ってしまうのだ。

そして人物がいい。子供達が皆んな優しいのだ。あの、ぐれていて殴り込みをかけた長吉が、雨の中、鼻緒を切らして往生していた信如をいたわって、自分の下駄を貸してやる。それを最初から美登利は、心のわだかまりから声をかけることができずに、そっと家の中から見ているだけであった。この情景におけるそれぞれの子供の思いの深さに、胸のつまる思いをする。

登場人物は今で言う中学一年生が中心。青春グラフィティというジャンルがあるが、さらに幼い子供達の物語。既に晩年であった一葉が、今では奇跡の14ヶ月と呼ばれる期間に心を込めて、命を込めて書いた作品である。

(初稿1999.10.6)

[リバイバル感想]

その後、2004年に樋口一葉は5千円札に採用された。それを初めて手にした時の感動を思い出す。世界にこんなに美しいお札があるものかと思いつつ、お金に困窮した一葉がお札になるという皮肉なめぐりあわせに唇を噛んだ。それ以来、財布に１枚（ひとり）は一葉さんが居るようにしてきた。いつも懐にある一葉さんにほっこり。

ランニング文学探訪全100作品の中での最高峰が本書である。その理由はすでに初稿で述べた。書き足りなかったことを補足すれば、多様な子供たちの走りを描きつつ、最後にみどりが

Copyright © Enomoto PE Office, all rights reserved.

もう走らないという対比で、みどりの変化をあざやかに描いたことだ。切れ味抜群ではないか。

どこかで書いたかもしれないが、高校生の頃の国語の授業で与謝野晶子の書いた、言文一致に関する檄文が取り上げられた。そしてこの文章の最大の矛盾は何かという設問である。その答えは、その檄文が文語調で書かれたということだ。そのせいか、どことなくぎこちなくも感じた。言文一致という理念はあっても、それをどのように具体的に口語表現をするか、それは当時の教養からは前例が乏しく、雲を掴むようなことだったのだろうか。一方一葉は擬古文であるが、その文章は実に瑞々しく、流麗で無駄がないように感じる。さらに一葉の原稿を見ると、その筆跡の美しさ、強さに惹かれる。晶子は一葉を愛読したという。

おまけ。実はこれを書いているモニタ画面の右半分では LOVEBITES の Helloween カバー、Eagle Fly Free が演奏されている。下手ギターの midoriさん、抜群の演奏力でかっこいい。（美登利つながりでした。）

(2021.1.12)

Copyright © Enomoto PE Office, all rights reserved.